西アジア学の発祥

中原与茂九郎

京都大学文学部史学科における西アジア史研究の新野に最初の手鋤を打ちこまれたのは英国牛津大学（クウインス・カレッジ）のアッシリア学教授A・H・セイス先生によつてであつた。それは大正六年（1917）10月1日（月）に開講され、11月19（月）に終講された「バビロニアに於ける初期住民の言語と文学」と題された特別講義によつてであつた。この特別講義に関して、当時助教授（考古学）で後に、教授、総長となられた、故浜田耕作先生の筆になる一文を次に引用しよう。

「京都帝国大学文科大学にては大正六年三月下旬来朝、爾来久しく滞洛なりし英国牛津大学教授アーチボルト・ヘンリー・セイス博士を聘して、同年10月1日より毎月曜1回午后2時より同3時に至る6回の特別講義を、文科大学陳列館教室に於いて開き、熱心なる教授学生其他来賓の来聴あり、此の世界的碩学より親しく其の専門的学科に就き、薀蓄の一端を聴くことを得たるは、我国学界の最も光栄とする所なり。今其の講義の内容に就き梗概を左に録せむ。」と6回にわたつての講義の概略を「芸文」大正7年1月号（才9年才1号）149～152頁に記載されている。セイス先生は終講の結語として「スメル文学研究に特殊の便宜ある日本の学者が、将来此の研鑽に興味を持ち、欧州学者の造詣以上に出る日ある可きを期待して已まず。此の講演にして幸に斯の如き研究の気運を助成するに多少の裨益あらば、余の至幸とする所なり」とて6回の特別講義を完了せられたと浜田先生は記しておられる。

セイス先生御自身、この京大に於ける特別講義に関する思ひ出を6年後に英国マクミラン出版会社から上梓された「回想録」の445頁に次の如く追憶しておられる。

「10月1日帝国大学で一連の講義を開始した。講義の題目は「シユメール文学と言語」であつた。この題目は牛津で学生や聴衆を引きつけなかつたものであつた。日本人による支那文字の採用はセム語系のバビロニア人によるシユメール文字の採用と類似しているし、バビロニアの原始言語シユメール語の構造と文法的特殊性とは日本語のそれ等と類似していることは記憶すべきことである。かつまた私は英語で講義した。勿論私は黒板を利用した。私はシユメール文字や漢字の外に通常使用されない特殊の英語を書くことが出来た。私は最善の努力をもつて同じ意味のことを種々ちがつたかたちで表現した。驚嘆すべきは講座室はノートをもつた熱心な学生で充満したことであつた。私はこれは外国人講演者に対する興味からのものと思つた。しかし2回目の講義の場合も同様であつた。この講義の終つたあとで私は質問があれば善んでお答へしたいとつ

け加へた。オ1回から最后の講義まで実際聴講生の数は減らなかつた。彼等はいそがしくノートし、各時間のあとで彼等が提出した質問は聞いたことをよく理解し、了解したことを示した。世界中何処に於てか、かかる知識に対する純粋の熱情を見出すことが出来ようか！」セイス先生は京大での特別講義の印象を以上の如く記し、「私の講義は終らんとしている。大学は別離の宴を私のためにもうけてくれた。京都大学のホールに掲揚するため写真がとられた。12月7日私は数名の日本の友人と共に神戸に向つた。私の為に最後の晩餐が設けられ、翌朝彼等と長崎行の汽船の甲板上で別れをおしんだ。」

新村出教授（現名誉教授）は上掲芸文144～148頁に「セイス教授を送る」の一文を寄せられ、「大正6年－1917年12月7日の朝、同僚数人と共にセイス教授の西帰を京都駅に送つた。三たび来遊あれかしと冀ひ一路の平安を祈りつゝ別れを告げた。うすら寒くどんよりと曇つた空模様清癯とやらんいふなる老教授の立姿が、動き始めた西行きの汽車の窓を通して段々見えなくなつた時分には、深いさびしみを感ぜずに居られなかつた。」……「この宴の後、10日ほど経て教授は、永らく親しまれた京都の地を去られたのである。嘗この晴れがましい饗宴の室、かの小じんまりとした講堂、ひとり面影を宿して其人をなつかしまするのみでなく、日本のスメリオロジー興隆の所として記念すべきの到来を期待したいものである。」

新村先生の文中に「三度来遊……」とあるは、セイス先生は既に「1912年」に来日され、この時京都では同志社と京都帝大で「一語一語の通訳付き」で講演をされている。「回想録」にある記念撮影の写真は現在考古学教室に掲揚されている。大正6年には未だ現在の文学部が文科大学と称せられていた時代である。かつて浜田先生からうかがつたのであるが、セイス先生に対する特別講義の謝礼は600円であり、セイス先生は将来アジア学研究の一助にもとその謝礼金を寄附されたので、その御好意の寄附金をもとにして、当時出版されていたシユメール語、アッシリア語の文法書、大英博物館出版の「楔形文字文献集」等を購入し、将来現はれるであらう研究者の使用を待たれたとのことである。諸書は考古学教室に保管されている。

以上京都大学換言すれば日本に於ける西アジア学の研究の最初の学術的手引は牛津大学アッシリア学教授セイス先生によつて行はれたのであつた。セイス先生は1933年2月8日88才の高齢で永眠された。

筆者は京都大学に於ける西アジア学発祥の事情をこれに関係された3人の先生の記録によつて紹介した次第である。因に1917年には筆者は岡山一中の中学生であり、その後文部省在学研究員として1929年5月下旬、牛津大学にて始めて、あこがれのセイス老先生に拝顔の栄に浴し、爾後一年有半、直接間接の御指導を同大学にて賜はつたのである。 —1957・10・1・—